

6. 日本語学習の目的

日本語学習の目的で最も回答割合が高いのは、「日本語そのものへの興味」で 58.1%。

① 世界全体の日本語学習の目的

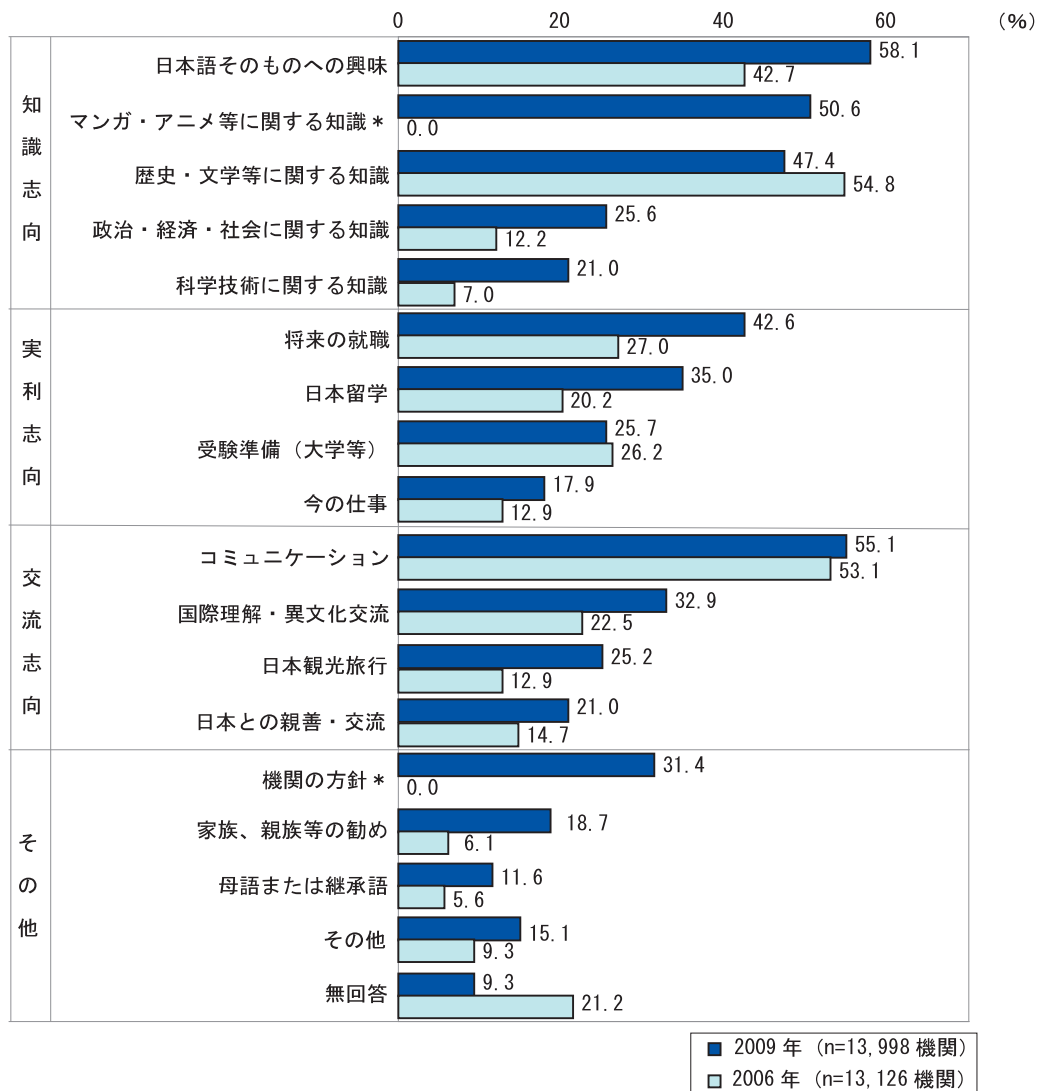
日本語学習の目的としては、「日本語そのものへの興味」が 58.1%と最も高く、次いで「コミュニケーション」(55.1%)、「マンガ・アニメ等に関する知識」(50.6%)となっている。

カテゴリー別に見ると、「知識志向」の割合が高い。「知識志向」の中では、2009年調査で新設された選択肢「マンガ・アニメ等に関する知識」(50.6%)が、「歴史・文学等に関する知識」(47.4%)を上回っている点が目立つ。「実利志向」のカテゴリー内では、「将来の就職」が 42.6%、次いで「日本留学」が 35.0%となっている。

2006年調査では項目の選択を「5つまで」としていたが、2009年調査では数に限りをつけていないため、全体として回答割合の増加傾向が見られる。しかし「歴史・文学等に関する知識」(7.4ポイント減)、「受験準備(大学等)」(0.5ポイント減)の2つの選択肢では減少している。「歴史・文学等に関する知識」については、2009年調査で新たに「マンガ・アニメ等に関する知識」を選択肢に加えたことで、回答が分散され、低下したものと推察される。

増加幅が大きい選択肢としては「将来の就職」が 15.6ポイント増、「日本語そのものへの興味」が 15.4ポイント増となっている。(グラフ4 日本語学習の目的(2006年調査との比較))

グラフ4 日本語学習の目的（2006年調査との比較）



* 2009年調査での新設項目

※ 選択肢の一部が異なるため、＜台湾＞の数値は含まない。

※ 2006年調査では項目の選択を「5つまで」としているが、2009年調査では数に限りをつけていない。2009年調査では新設項目もあり、単純には比較できない面もある。

6. 日本語学習の目的

② 教育段階別の日本語学習の目的

日本語学習の目的を教育段階別に分析すると、初等教育機関では、当然の結果ではあるが「今の仕事」(2.7%)、「日本留学」(7.6%)、「受験準備(大学等)」(5.3%)、「将来の就職」(12.8%)が回答全体に比べて極端に低い。一方で、「日本語そのものへの興味」(73.4%)、「機関の方針」(64.0%)、「歴史・文学等に関する知識」(62.3%)、「国際理解・異文化交流」(59.0%)が全体に比べて高い傾向を示している。

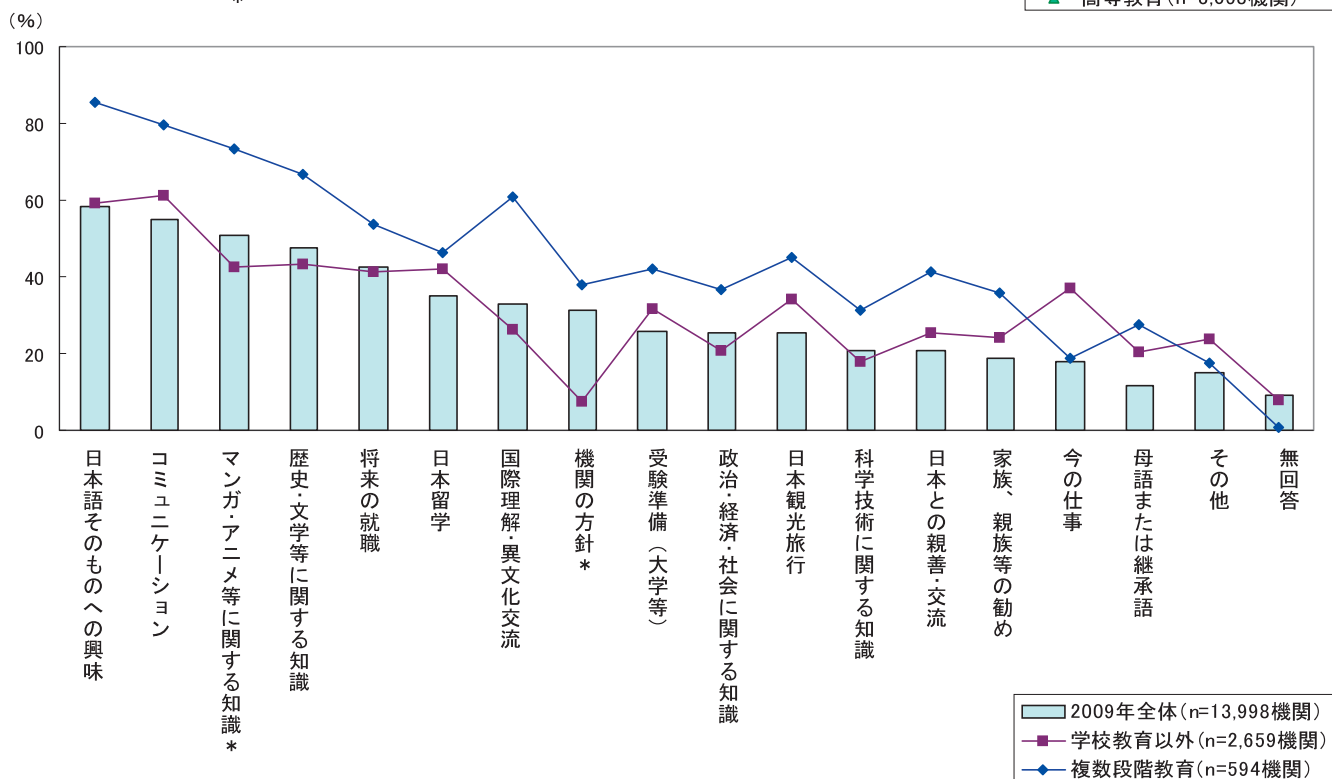
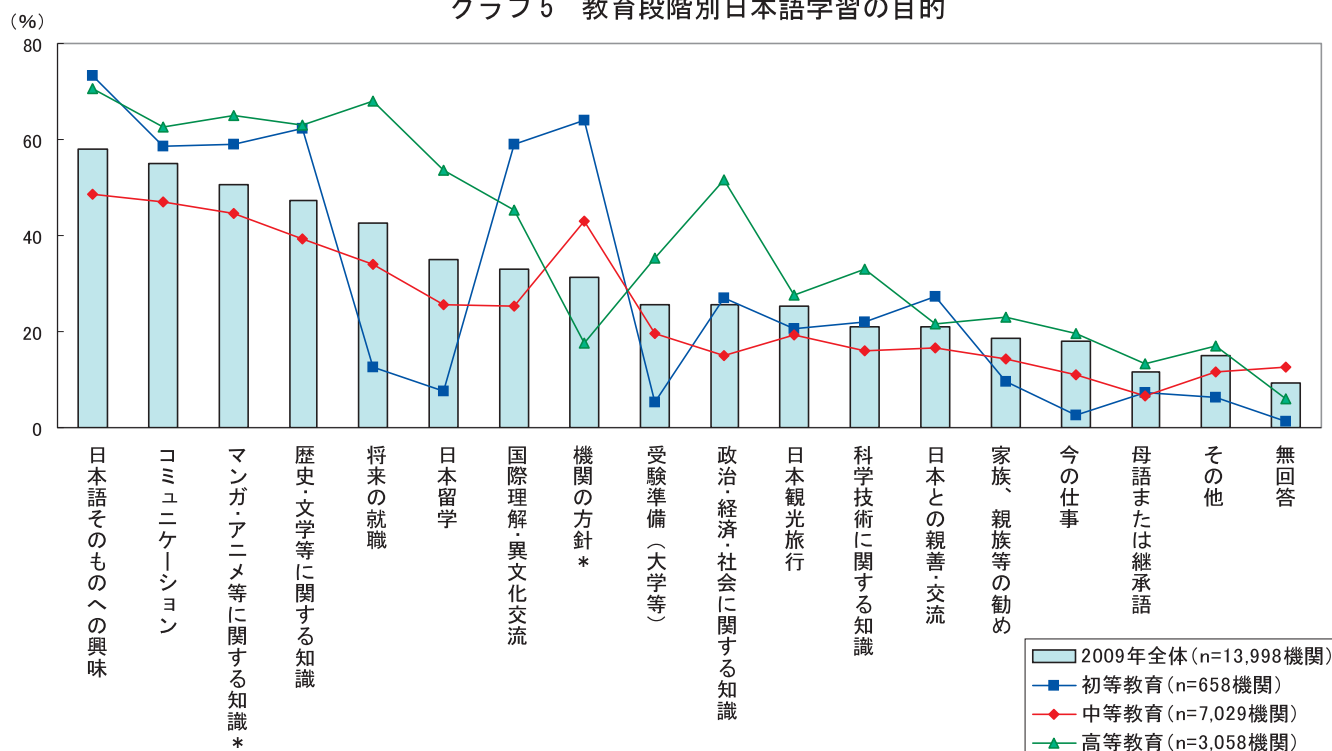
中等教育機関では、初等教育機関と同様に「実利志向」の選択肢が低い傾向にあるものの、初等教育機関ほどほかのカテゴリーとの差は見られない。選択肢全般を通じて全体よりも低い割合となっており、「機関の方針」(42.9%)が唯一全体よりも高い割合を示している。特に「日本語そのものへの興味」(48.6%)、「政治・経済・社会に関する知識」(15.0%)、「歴史・文学等に関する知識」(39.2%)、「日本留学」(25.7%)において全体と比べて10ポイント程度低い割合を示している。

高等教育機関では、中等教育機関とは一転して「機関の方針」(17.8%)を除くすべての選択肢において全体よりも高い割合を示している。中でも「将来の就職」(68.1%)、「歴史・文学等に関する知識」(62.9%)、「政治・経済・社会に関する知識」(51.5%)が全体に対して特に高い割合を示している。高等教育機関では自身の興味により日本語学習を選択する機会が多いため、具体的な目的や興味が明確になり、回答に反映されたと推察できる。

学校教育以外の機関では、「今の仕事」(37.2%)、「日本観光旅行」(34.2%)が全体と比べて高い割合を示し、自発的な学習者が多いことから当然とも言えるが「機関の方針」(7.4%)が特に低い割合となっている。

複数段階教育機関では、高等教育機関と同様にすべての選択肢で全体よりも高い割合を示している。特に「日本語そのものへの興味」(85.4%)、「コミュニケーション」(79.6%)、「国際理解・異文化交流」(60.8%)が全体と比べて高い割合を示している。(グラフ5 教育段階別日本語学習の目的)

グラフ5 教育段階別日本語学習の目的



* 2009年調査での新設項目

※ 選択肢の一部が異なるため、＜台湾＞の数値は含まない。

※ 2006年調査では項目の選択を「5つまで」としているが、2009年調査では数に限りをつけていない。2009年調査では新設項目もあり、単純には比較できない面もある。